

「自らかかわり」「考えを深め合う」子どもの姿を求めて

～体験活動と言語活動が充実する単元づくりと授業づくり～

横浜市立三ツ沢小学校 八嶋 真理子

油谷 修次

1. 実践の目的

三ツ沢のまちでは、三ツ沢せせらぎ緑道や豊顕寺市民の森をはじめ、市街地にあつて多くの自然を見つけることができ、四季折々の動植物の様子を観察することができる。また、まちにはたくさんの魅力的な人が働いていたり、魅力的な公園や店などが存在したりしている。そうした環境の中で、本校の子どもたちは、まちにある「ひと・もの・こと」に対して素直に驚き、それを伝えたり記録したりする姿が多く見られる。一方で、豊かな環境にあつても、その価値を感じたり、自分から疑問をもって追究したりする場面が少ないということが言える。また、追究する場面においても、情報を得たところで満足し、話し合ったり結果を確認し合ったりすることに対する意義を見出している様子があまり見られない。そこで、研究テーマを「自らかかわり」「考えを深め合う」子どもの姿を求めて～体験活動と言語活動が充実する単元づくりと授業づくり～と設定した。

今回の研究では、個別級も含めて1年生から6年生までの子どもたちが本気になって身の回りの「ひと・もの・こと」にかかわり、主体的に学習に参加する姿を具現化する。また主体的な学習の中で、人とのかかわり、対象とのかかわりを通して、子ども自身が自分の考えを深めていく姿を具現化する。そのためにどのような単元づくりをするか、どのような授業づくりをするか、具体的な方法や手立てを明らかにする。

2. 実践の内容

- ①体験活動と言語活動が充実した単元の在り方を明らかにする
 - ・単元の中でどのような体験活動を位置づけるか
 - ・単元の中で体験活動の後に、どのような言語活動をさせるか
- ②体験活動と言語活動が充実する授業の在り方を明らかにする
 - ・1時間の授業の中でどのような体験活動を位置づけるか
 - ・1時間の授業の中でどのような言語活動をさせるか



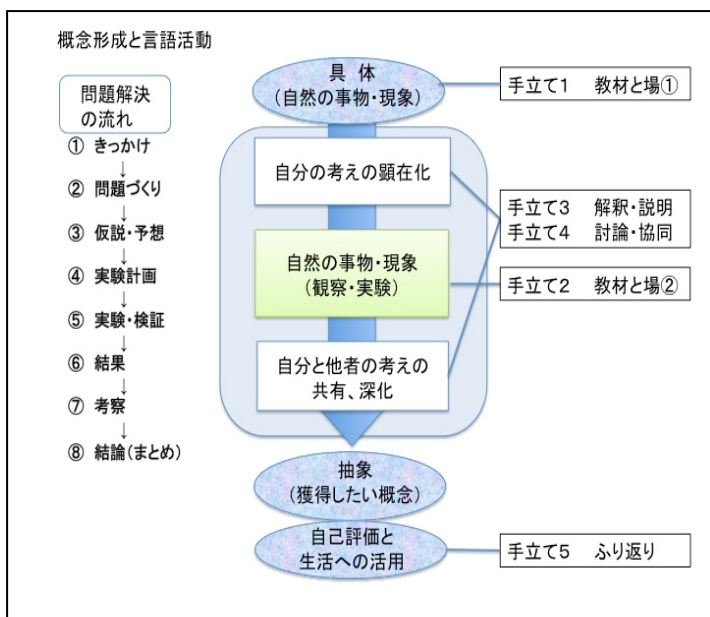
<自らかかわる＝体験活動の充実>

「自らかかわる」とは、主に子どもが主体的に身の回りの「ひと・もの・こと」にかかわっている姿としてとらえている。子どもが必要感をもって、対象にかかわるために何をしかけていくかを考えていくことが研究の1つの視点となる。つまり「自らかかわる」は、体験活動の充実を表す。子どもは体験活動が充実していると、自分なりに問題を見い出すことができる。また体験活動が充実していると、問題解決が自分ごととなり、実感を伴った理解につながる。

<考えを深め合う＝言語活動の充実>

「考えを深め合う」とは、主に子どもが他者の考えを生かしながら、自分の考えを表現し、対象や他者を理解していく姿としてとらえている。子どもが主体的に学習する中で、自分の考えを深めていくことを大切にする。そのために、事実をつきあわせたり、分かったことを話し合ったりする活動を大切にする。つまり「考えを深め合う」とは言語活動の充実を表す。子どもは体験活動が充実していると、それを誰かに伝えたいものである。そこでこの伝えたいという気持ちを大切にして、言語活動を充実させると子どもの理解は深まっていく。

3. 具体的手立て



手立て1 <教材と場①> 体験活動
主体的に問題をもてるように導入における教材と場を工夫する

手立て2 <教材と場②> 体験活動
自分の問題を追究できる観察・実験の教材と場を工夫する

手立て3 <解釈・説明> 言語活動
問題解決の過程で、自分の考えを組み立てるための「解釈・説明」の場を工夫する

手立て4 <討論・協同> 言語活動
個の考えから集団の考えを作るための「討論・協同」の場を工夫する

手立て5 <ふり返り> 言語・体験活動
自分の学びを見つめ、見方・考え方の変化に気付くための「ふり返り」の場を工夫する

4. 実践の成果

○手立て<教材と場>体験活動の充実例（6年：人の体のつくりと働き）

小腸の働きについて調べたことに実感をもてるように、豚の小腸を実際に観察する場を設定する。

実物を観察することで、小腸の働きを実感することができた。



○手立て<教材と場>体験活動の充実例（5年：流水の働き）

石が川を流れるうちに削れて丸くなる仮説を証明できるように、長さ1mの筒を用意し、表面に色をつけた石を入れて振る実験を設定する。

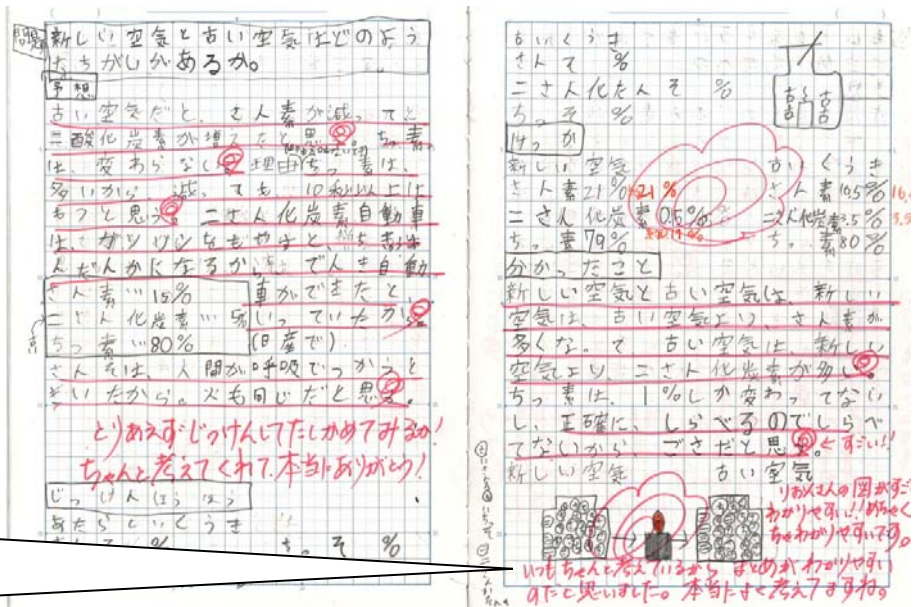
筒の中で流れる水を再現することで、石を削る水のパワーを体感することができた。



○手立て<解釈・説明>言語活動の充実例（6年：物の燃え方）

空気がどのように変化していくかをイメージしやすいように、新しい空気がろうそくの火を燃やした後にどのように変化していくかを図や絵に表しながら説明できるよう助言する。

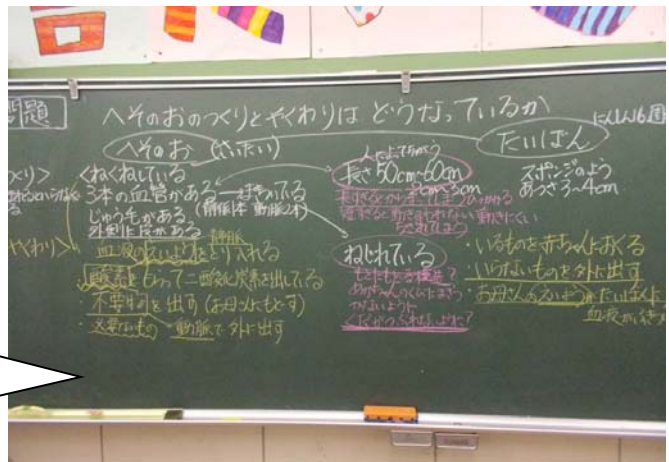
図を使うと、見えない空気でも、変化の様子を説明しやすくなる。



○手立て<討論・協同>言語活動の充実例（5年：人の誕生）

胎盤、へその緒の働きについて子どもの考えが深まるように、子どもの発言した内容を形状と働きの項目で整理して板書に可視化する。

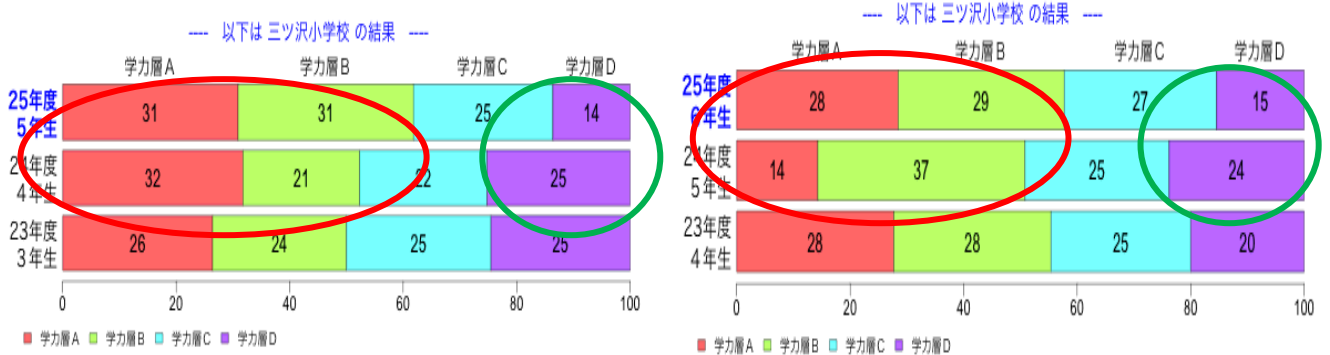
「つくり」と「働き」を分けて構造的な板書をする、板書が子どもの考えを深め合うツールになる。



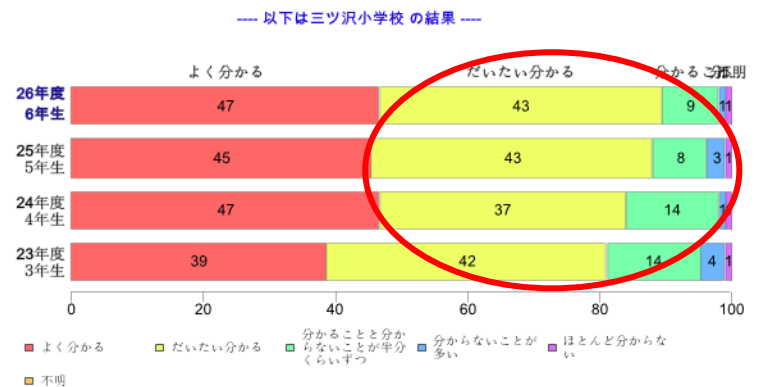
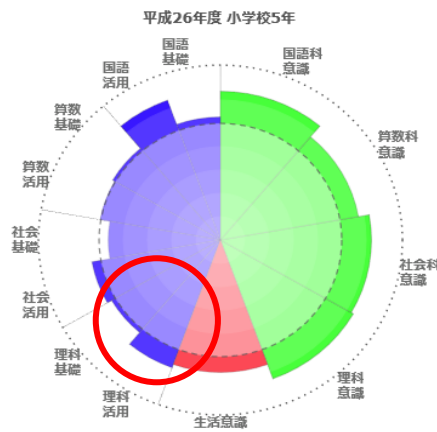
5. 成果の測定

○横浜市学力学習状況調査の結果から理科における学力層の経年変化をみる。

学力層のA, Bは上位群、C, Dは下位群を表す。財団の助成をいただき体験活動、言語活動の充実を図ることで、理科における学力層が良好に変化している。特にD群は大幅に減少してきた。



2 学校の授業は、分かりやすいですか。



どの学年も活用に関わる問題について市の平均を上回り、活用力の伸長がみられる。

「学校の授業は分かりやすいですか」についての児童の意識調査の経年変化をみると、この3年間で「分かる」の割合が9割近くに増加した。「分からない」子どもがほとんどいなくなった。

6. 成果と課題

体験活動の充実を図り、自然の事象との質の高い体験をすることで、子どもの学習意欲は高まり、そこには子どもの豊かな表現があふれ出る。すなわち、質の高い体験は、子どもの豊かな言語活動を促し、授業に対する満足感や学力の向上につながる事が分かった。さらには、考えを深め合うためには、体験を基に協働で思考する場を設定することが有効であることも分かってきた。

今後はさらに「考えを深め合う」場づくりについて継続して研究していきたい。

